

博 士 学 位 論 文

内容の要旨及び審査の結果の要旨

課程修了によるもの（課程博士）

第 9 号

平成29年 3 月

東北福祉大学

は し が き

この冊子は、学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日）第 8 条の規定による
公表を目的とし、本学にて博士の学位を授与した者の論文内容の要
旨及び論文審査の結果を収録したものである。

課 程 博 士

総 合 福 祉 学 研 究 科

社 会 福 祉 学 専 攻

氏名（本籍）	根本 瑛 （日本）
学位の種類	博士（社会福祉学）
学位記の番号	博甲第9号
学位授与年月日	平成29年3月17日
学位授与の要件	学位規則第4条1項該当（課程博士）
学位論文題目	「地域福祉原理論研究 —リゾーム的機能をもつ再帰的コミュニティの生成—
論文審査委員	主査 教授 渡辺 信英 （東北福祉大学） 副査 教授 大橋 謙策 （東北福祉大学） 副査 教授 根岸 直樹 （東北福祉大学） 副査 教授 白澤 政和 （桜美林大学）

《論文内容の要旨》

I. 論文の構成と概要

1. 論文の構成

序章

0－1 リゾームとしての地域福祉原理論の必要性

0－2 地域福祉を展開する必要要件

第一章 地域福祉原理論を構成する表象

1－1 差異

1－2 協働

1－3 権力

1－4 自由

1－5 ケア

1－6 正義

第二章 地域福祉原理論の言説

2－1 差異と協働

2－2 権力と自由

2－3 ケアと正義

第三章 地域福祉の諸相

3－1 これまでの代表的な地域福祉の概念

3－2 社会の生成変化により生活機能の外生化に関する検討

3－3 住民参加に関する検討

3－4 地域福祉計画に関する検討

第四章 リゾームとしてのコミュニティ

4－1 再帰的通時態・リゾーム的共時態

4－2 コミュニケーション的出来事

4－3 生成変化するコミュニティ

4－4 リゾーム的機能

第五章 終章

5－1 解釈から創発へ

5－2 専門家システムと信頼

5－3 コミュニティの生成

5－4 新しい視座

5－5 今後の課題

2. 論文の概要

近年の地域福祉に関する研究は実践方法と技術に重きをなしている研究成果が中心であり、かなりの成果を挙げている。ということは原理論の研究が少ないということである。本論文は原理論な視点で論述している。

複雑化・多様化した現代社会は、種々な不安を生起させ、それに伴いニーズも多様化している。しかし、現在の社会福祉制度のみでは「潜在するニーズ」「多様なニーズ」に対応することが困難になり、そのため、福祉政策は、ガバメント（中央・ツリーの）からガバナンス（地方・リゾーム的）に移行し、人々の生活基盤と密着している地域が担うことが要請され、地域福祉が福祉の主流的位置を占めてきたのである。

本論文において、地域福祉をリゾーム型組織として捉え、地域福祉に新しい視座の展開を試みている。リゾームとはドゥルーズ＝ガタリの比喩的な概念であり、「地下茎」のことである。地下茎は特定の中心をもたず、異質な線が交差し、横断し、生成されている状態である。リゾームに対してツリーが対置される。ツリーは「幹、枝、葉」のことであり、階層的な秩序、上下関係、二項対立のことである。

序章では、近年の地域福祉研究の傾向を踏まえ、地域福祉を実践するうえで認識すべき課題を三つ提示した。①地域における生活のしづらさから具現化された課題、②地域を基盤として生活を営む住民のソーシャル・キャピタルの醸成、③日本社会における支え合う再帰的社会システムの構築の三点である。

①は個のニーズから、②は関係性から、③は地域社会の再帰性システムから述べている。個のニーズとして「自己実現」をテーマにして、マズローを批判的に検討した。②の関係性は、地域、個人、中間集団をどう関係づけるか、そのための社会の仕組みとして「信頼」、「規範」、「ネットワーク」が重要と考え、それらを強調するソーシャル・キャピタルを提示した。③の再帰的社会システムは、近代から現代（あるいは近代後期）は「再帰的」に構築されているというギデンスの「再帰的近代」を採用した。ギデンスの再帰性は「自己再帰性」と「制度的再帰性」をテーマにしている。いずれも「モニタリング—省察—改善—生成変化」そしてまた「モニタリング」するという再帰性である。

第一章は、序章の「個」、「関係性」、「再帰的社会」と「地域福祉」等のテーマを原理論（あるいはさらに、原理論＝段階論＝実践論）として展開するとき、共通となる表象＝記号＝シニフィアンが重要な要素となり得るので、さまざまな言語の中から地域福祉のシニフィアンとなり得るものを六個選択した。「差異」、「協働」、「権力」、「自由」、「ケア」、「正義」である。それらを先行文献から考察した。

「差異」についてはドゥルーズの考え方を基に展開した。そして白澤のケアマネジメントにおける「システム」と「プラクティス」の関係を引用し、筆者は「プラクティス」省察・改善（P・D・C・A）＝「システム」＝「プラクティス」省察・改善（P・D・C・A）＝

「システム」と、「差異・反復」、「再帰性」が常に動くことを導き出した。地域福祉の実践は差異に満ちている。行政、企業、住民、専門家、ボランティア、福祉ニーズの対象者等、差異のある人々の集合である。そして「ケア」、「援助実践」も差異・反復され再帰性による日々の省察・改善が行われ、そこには同一性はなく差異のみがある。

「協働」についてはニールJ・スメルサーの集合行動論を基に展開した。筆者としては資源運動員論の「合理性、合理的組織、合理的個人」と集合行動論の「感情・思考・解決」という双方の複合的思考が必要であるとする。阪神淡路や東日本等の大震災は災害から復旧そして復興までの長期化の中で、専門家、非専門家等の参加者、地域住民、行政等が「合理性」と「感情・思考・解釈」の視座で取り組み、新しい地域コミュニティを創発するべきであろう。

「権力」は様々な思考と伝統があり、理論もリゾーム的である。同じ方向に理論化するのは困難な作業である。その中でフーコーの「生権力」の考え方を中心に展開した。フーコーのいう生権力が思考・内容を変えて、現代に生かされており、「差異の同一性」（差異の主体と主体が同じ価値に向かう）であるべき「ケアするもの」と「ケアされるもの」が知の媒介として「知をもつケアするもの」と「知をもたないケアされるもの」となり、そこに無意識に命令・服従の権力関係が存在している。

「自由」については、「近代自然法的国家論」（自然状態における自由を重視し、自然権と社会契約論に基づく国家論）を展開するホッブス、ロック、ルソーと、「全体主義的国家論」を論じたヘーゲルの考え方を述べ、さらに宮本や菊池の考え方を踏まえたうえで、筆者は社会保障、社会福祉は自由と調和すべきであるとの考えであることを提示したい。地域福祉は社会福祉の主流となったが、地域の中で生きることは、他者との関係性の中で生きる。つまり、他者との承認関係の中で生きることであり、それは他者との自由を認め合い生きることでもある。地域福祉は「生きやすさ」のために、地域という生活空間の中で、自由をリゾームのように創出していくのである。その支えとなるのが社会福祉制度であるべきである。

「ケア」については、メイヤロフの理論を先行研究として使用した。メイヤロフに対する評価の異なる森本と上野の考え方を踏まえたうえで、筆者はケアの思考を地域福祉においてソーシャル・キャピタルとして展開される必要がある。その展開をするためにケアの思考を私的領域から公的領域まで広げ、社会政策に具体化する必要があるとの考えを述べた。

「正義」についてロールズを主に理論を展開した。福祉国家を思考するとき、ロールズは重要な役割を果たしている。ロールズは社会契約説を現代的に再構成した「公正としての正義」を思考し「正義の二原理」を提唱した。公正としての正義を選択するための方法として「原初状態」と「無知のヴェール」を設定した。更に、ロールズの「無知のヴェール」に対して批判的論説を展開したサンデルの考え方にも触れた。サンデルは「負荷ありし自己」を主張し、人々は必ず何らかの社会階層やコミュニティに属しているとし、何ら

かの負荷を担い、具体的な出来事として連続的に経験しているとした。関係性によってコミュニケーション的行為が行われ、コミュニケーション的出来事が生まれる。サンデルの正義はこのような関係性の中から共通善が生じることが重要なポイントである。

この六つの表象は地域福祉が生成するための原点として捉えている。

第二章では、第一章で考察した 6 つの表象を「差異と協働」、「権力と自由」、「ケアと正義」に組み合わせ、再検討した。

本稿の「協働」は東日本大震災のときのようなときの住民のパニック、不安の中における対応に焦点を当てた。そこには、医師、看護師、ソーシャルワーカー、ケアワーカー、研究者、自衛隊、消防士、行政等の専門家や地域住民、ボランティア、NPO 等の非専門家の差異ある人々が集合した。その人々は「合理性」と「感情・思考・解釈」という異なった思考を持ちながら、リゾーム的に接続し、あるいは切断し、それらを再帰的に繰り返しながら、パニックによる不安から相互承認による組織化を経て制度としての新しい秩序を生成していくのである。そこには「差異」と「協働」が弁証的に否定するのではなく、ときには融合し、ときには統合し、肯定し合い、生成していくのである。

「自由」、「幸福」、「福祉」は人間の生にとって基本的な課題である。社会福祉は人間の「生」、「幸福」、「自由」、「福祉」に関わる。その関わり方によっては、人の「生」、「自由」、「幸福」を左右する。ソーシャルワーカーは人の「生」、「幸福」、「自由」に直接関わる。その援助は専門性としての「知」に裏付けされる。ときには「専門知」が権力となる。「援助するもの」と「援助されるもの」との間に権力関係が生ずることがある。見えない権力である。その権力によって「尊重」、「ノーマライゼーション」等がときには無意味になる。「社会福祉」、「社会保障」、「援助」は、利用者が地域社会において自由に生きるためにある。本稿において、「自由」は「社会福祉」と調和すると述べた。また、権力は「生権力」となり、福祉につながりを持つ。つまり「福祉」も「生権力」も「自由」と親和性をもつと考える。

現代の福祉国家を思考するとき、ロールズは重要な役割を果たしている。功利主義を批判するロールズは功利主義にかわって「正義」を理論的根拠とした。その方法に「無知のヴェール」と「原初状態」を置き、正義の二原理を提示した。その第二原理に福祉への視点がある。つまり、ロールズは生活の困窮は自然的才能の不平等分配の結果であるとして、社会の最も不遇な人々に最大の便益を失うことが「正義」だとしている。生活の困窮の原因である障害、高齢、要介護、貧困に対して、「ケア」が役割を果たす。「福祉」、「地域」、「ケア」がつながりを持ち、対象者の「自立」と「尊厳」のためにケアサービスが提供される。そこに「正義」があるのである。

第三章では、地域福祉研究のこれまでの代表的な概念を整理した。その理論の共通項は「住民参加」、「コミュニティ」、「組織化」、「ニーズ」、「生活」等である。筆者は右田の「地

域社会における生活の場に注目し、生活の形成過程で住民の福祉への目をひらき」と大橋の「一般コミュニティと福祉コミュニティの分類はあまり意味がなくなった」の考えに注目した。それらが原理論に対応する言説として、ハーバーマスの「コミュニケーション」、「間主観性」、「生活世界」、「システム」を提示した。更に生活世界がシステム化されるなかで、生活世界としての機能が外生化されてきたわけであるが、それに対応する社会システムの必要性を述べ、構築が進んでいる地域包括ケアシステムにも言及した。さらに「住民参加」にはページを割き、市民が参加し、フランス革命にまで影響を及ぼし、近代市民社会形成のための世論を形成した「コーヒーハウス」を説明した。さらに「地域福祉計画」に対する検討においては、政策、制度、関連法律等を概観した。地域福祉計画は再帰的に展開され、内容はリゾーム的つながりであることを確認した。

第四章のテーマは「リゾームとしてのコミュニティ」とした。

本章はまず近代と近代以降について説明している。近代の特徴としては大きな物語の失墜と第三者の審級の衰退を挙げた。大きな物語としては、神、国王、統治者、旧憲法、天皇、家制度の戸主等が考えられたが、その存在が消滅した。第三者の審級は大澤真幸の造語である。超越的な他者あるいは共同体を位置づける超越的な他者のまなざしのことである。そして脱近代（あるいは近代後期）として「小さな物語」、「ポストモダニズム」、「再帰的近代」等が現れた。「リゾーム」も現代社会と高度資本主義のメタファーとして用いられることがある。

歴史的な見方として、次に日本の地域福祉の流れを概観した。「福祉三法の時代」、「福祉六法の時代」、「施設ケアの反省とコミュニティ形成の時代」、「福祉八法の時代」、「介護保険法成立の時代」、「地域福祉の時代」、「地域包括ケアの時代」等を通時的に概観した。現在は地域福祉の新しい展開の時代であり、その実践をリゾーム的とし、その地域をリゾーム的共時態と表現した。時代を単に「流れ」として捉えたが、今後の課題は時代の区分を段階論で分析すべきであると思う。

地域においては諸要素が自由に横断的にリゾーム的に接続を繰り返している。その接続はコミュニケーション行為となっている。そこで、ハーバーマスの「コミュニケーション行為」を取り上げ、コミュニケーションが基になっている「間身体性」（西村）、「求めと必要と合意」（大橋）、「対話的行為」（小野）について述べている。また、コミュニティは時間的・空間的に生成変化し、通時的に見ると希薄が進んでいることを確認した。

第五章は地域福祉の多様なニーズ（潜在・顕在）の解決のため「回復の解釈学」から「知の創発」への視座を提言した。まず、「専門性への信頼」である。現代社会は差別、貧困、排除、虐待、いじめ、ハラスメント等さまざまな問題が生起する。ギデンスの「存在的不安」である。その解決のため専門家システムが重要であろう。その専門家システムは信頼

によって有効に作用する。信頼されるためには深い知と高度なスキルが必要である。専門家は絶えず専門性を向上させ、現代社会の複雑性、迅速な変化への対応をしなければならない。児童福祉法の改正（2016年）も専門家（援助者）にそれを要求している。

ソーシャルワークの専門性は、要素還元主義、システム理論、エンパワメントとストレングス等が強調されている。それらが「エビデンスに基づいて」こそ、信頼が出来ると言及した。

次に「コミュニティの多元化」を提言した。ポストモダニズム的な小さな物語が地域に反映し、さまざまな形のコミュニティをつくりあげた。生活の場であるコミュニティや生産の場であるコミュニティ、或は趣味活動の場である。それらのコミュニティが重層的につながる。つまり「コミュニティの多元化」の視座である。その他「地域福祉システムの地域の文化性、柔軟性」、「再分配の方法と国民への啓蒙」、「国民参加による地域福祉」等の視座を提言した。

《論文審査結果の要旨》

Ⅱ．論文審査結果の要旨

1．論文の要点と評価

本論文は地域福祉の原理論研究である。地域福祉における原理論研究は先行研究の数が少なく、本研究はオリジナリ性もあり、意義のある内容となっている。

本論文はドゥルーズの「リゾーム」を補助線としながら、「再帰性」、「差異＝微分」で補強して本論を展開している。

地域福祉の根源に「差異」、「協働」、「権力」、「自由」、「ケア」、「正義」の表象が因子として潜在しているとして、その六個が本論文の中に随所に見られ地域福祉との関係を論じている。序章において六個の表象が地域福祉において顕在、潜在していることを説明し、第1章ではそれぞれの表象について詳細に論じている。「差異」においては先行研究を例にして述べている。つまり、差異には同一性はなく反復し、その反復は差異の連鎖であり、その「差異・反復」「再帰性」の現動によって新しい価値や意味が創造されると論じている。また、地域福祉の実践についても言及し、行政、企業、住民、専門家、ボランティア、ニーズの対象者などの差異ある人々が「リゾーム的」に結合し、切断され、生成され、変容される、としている。その他の表象についても説明し、例えば「自由」については、福祉サービス利用者は社会福祉・社会保障によって、安心した生活ができ、地域社会において自由な行動が可能となるとし、「自由」と「福祉・保障」との親密性を論じ、さらに地域社会において自由を多元的に作ることを提示している。

第2章においては「表象」を「差異と協働」、「権力と自由」、「ケアと正義」に組み合わせている。これによって、「表象」は静的から動的になり、共感し、共振し、変調し、生成され、としている。第4章においては「表象」を地域福祉の機能から論述している。地域福祉を「再帰的通時性」と「リゾーム的共時性」と捉え、特に「リゾーム的共時性」においては「差異と協働に基づく結合の機能」、「権力と自由に基づく切断と継続の機能」、「ケアと正義に基づくコミュニケーション的出来事の連鎖を作りだす機能」と六個の表象を組み合わせ機能面から論じている。

審査委員会は「リゾーム的共時態」に対して、地域福祉の現状を数カ所の地域を比較すべきとの意見もあったが、地域福祉が福祉の主流になるまでの福祉制度の歴史的変容を「再帰的通時態」とし線的につなげ、現在の地域社会を「リゾーム的共時態」と表現した事は意欲的な試みとするとして評価した。六個の表象と地域福祉の関係にたいする展開は、新しい視座があり、新鮮であると評価した。

第3章の「地域福祉の諸相」は、これまでの代表的な概念を整理している。特にハーバーマスの「コミュニケーション」、「間主観性」、「生活世界」、「システム」について

言及し、地域の生活世界の機能が外生化したことを述べている。また、地域福祉における「住民参加」について「コーヒーハウス」を例示し、説明している。

また、地域福祉の形成のために重要な「タスク・ゴール」、「プロセスゴール」、「リレーションゴール」について六個の表象との関連について述べている。

審査委員会は先行研究の渉猟を認められが、その検討、つながり、についてさらなる深化を求めた。

終章において、地域福祉は「回復の解釈学」から「知の創設」への視座のため、5個の方向性を提言している。「専門家の信頼」、「コミュニティの多元化」、「地域福祉システムの地域の文化性、柔軟性」、「再分配の方法と国民への啓蒙」、「国民参加による地域福祉」などである。

審査委員会は5個の提案は「原理論的」と「実践的」との調和があると評価した。

その他、本論文は「再帰性」によって補強され、ギデンスの「自己再帰性」と「制度的再帰性」を適用しながら地域福祉の理念、制度、機能を論じている。

2. 論文に残された検討課題

①各地域の地域福祉の現状を「リゾーム的共時態」という視点で調査、分析し、それと六個の表象との関係を研究する。

②地域福祉が福祉の主流となった過程を「通時態としての過程」という視点で研究する。

③地域福祉システムのためのコミュニティの多元化を実証的に研究してほしい。

④「差異と協働」、「権力と自由」、「ケアと正義」の組み合わせを地域福祉において説得あるものとし、さらに、たとえば「差異と協働」の動的な交響から新たな表象の創造を期待する。

3. 博士（社会福祉学）授与の可否

予備審査は2017年1月25日に公開に行われ、各委員、参加の教授から指摘された点を修正した。特に「差異」、「協働」、「権力」、「自由」、「ケア」、「正義」の6個の表象と地域福祉の関係性を明確にとの指摘であった。それを修正し、さらに、他の箇所も補強して、構成、内容とも進展した論文になった。

審査委員会においては本論文の「先行論文の渉猟、検討・批判する能力」、「論文の構成力」、「新しい視座」、「今後の可能性」などを審査し、文言の不明確な箇所は若干あるが、審査員全員が博士（社会福祉学）を受けるにふさわしい論文であると判断した。

平成29年 3 月31日印刷
(非売品)
平成29年 3 月31日発行

発 行 東北福祉大学
編 集 東北福祉大学大学院事務室
印 刷 (株)ホクトコーポレーション